

# 新自由主義の欠陥 尊敬や承認の欠如 暗黙の侮辱へ憤り

トランプ米政権がとうとう再始動した。米政治哲学者マイケル・サンデルさんは、富の偏在にとどまらない尊敬や名譽、承認をめぐる不平等が、異形の政権を再来させたとみる。長く見過ごされてきた「暗黙の侮辱」とは何か。どうすれば働くことの尊厳を人々の手に取り戻し、民主主義を立て直せるのか。

トランプ大統領の復権が示す、米社会の病根をどこに見いだしますか。

「この40〜50年間にわたる新自由主義的なグローバル化は、トップ層に大きな報酬をもたらした一方、平均的な労働者には賃金の停滞と雇用の喪失をもたらしました。そうしたなか、エリートが自分たちを見下し、日々の仕事に敬意を払っていないという労働者の憤りが、トランプの成功の根本にあります。彼の復帰は、バイデン政権の4年間でその問題が解決されずしてきたことを示しています」

トランプ氏は総得票数でも勝ちました。「トランプ現象」は一時的・局所的な逸脱ではありませんでした。

「それどころか、トランプは米国政治を根本から再編することに成功しました。（1930年代の）ニューディール政策にさかのぼる民主党の伝統は、労働者の代表であり、権力者に対抗する人民の代表であり、経済権力の集中に対する牽制の代表であることでした。これが2016年以降は逆転しました。共和党は富裕層を支える政策を手がけてきたにもかかわらず、大学教育を受けていない人々や労働者がトランプに投票しました」

「中道左派が労働者の支持を失い、権威主義的なポピュリストがそうした層へのアピールに成功しているのは、英独仏など多くの民主主義国家で見られる現象です。金融主導で市場寄りのグローバル化を、中道左派が受け入れたからです」

トランプ氏は前回、そこまですべてを利する政策に取り組んだ印象はありませんが。

「支持者の多くが頼りにする医療保険制度を廃止しようとして、大減税で労働者よりも富裕層と大企業に利益をもたらしたりしました。にもかかわらず、労働者は民主党から疎外されていると感じ、代弁者として信頼しなかったのです」

あなたをはかねて、民主党のクリントン、オバマ両政権が新自由主義に十分対抗しなかつ

# 働く尊厳 取り戻すために

た、と批判してきましたね。

「彼らのメッセージはこうです。競争に勝ちたければ大学に行け。どれだけ稼げるかは、何を学ぶかにかかっている。努力さえすればなんとかなる、と。しかし、解決策を大学の学位に求めることは、その不平等をもたらした構造的な原因、つまり新自由主義的なグローバル化の欠陥に目をつむるものでした」

「彼らは、このアドバイスに暗黙のうちに含まれる侮辱を見落としていました。新たな経済で苦しんでいるのなら、また大学を出ていないならば、失敗は自分のせいだという侮辱です」

「仏経済学者トマー・ピケティ氏はあなたとの共著で、中道左派の失敗は、貿易や雇用という経済問題と格闘しなかったことにあると主張しました。」

「民主党が苦しんでいるのは、金融規制緩和や自由貿易など新自由主義的な経済政策を受け入れた結果だ、という点でトマと一致します。ただ、強調点の違いはあるかもしれません。私は、経済の問題は文化の問題と切り離すことができないし、すべきでもないと考えます」

「不平等の拡大に伴い、能力的な個人主義が行き過ぎ、成功に対する態度が変質しました。頂点に立った人々は傲慢にも、成功は自身の能力と努力によるもので、苦しんでいる人はその運命に値する道を選んできたはずだと考えるようになりました。取り残された人々は経済的に苦しただけでなく、高学歴のエリートに見下されているという屈辱感を募らせています」

「つまりは、社会的な名譽や尊敬、承認、尊厳の欠如です。これらは経済の問題か、文化の問題か、政治学者

1953年生まれ。米ハーバード大教授。仏経済学者トマ・ピケティ氏との対談を書籍化した「平等について、いま話したいこと」（早川書房）を今月刊行。

マイケル・サンデルさん

「公の場の再構築と「生産者」の再評価 無力感の克服にも

「新たな統治の哲学を示せなかったことも大きい。ニューディール時代、当時のルーズベルト大統領は公共投資や社会保障、労働組合の支援など多くのプログラムを手がけました。それがまたたく新しい経済の姿なのだ」と国民にわかりやすく、感動的な言葉で語りました。だから今でも私たちはニューディールを覚えています」

「しかしバイデンは、自身の政策が象徴する大きな意味、つまり経済における政府の役割の転換について、説得力あるメッ

セージを打ち出せなかった。それがいかに労働の尊厳を取り戻すことにつながるかも説明できませんでした。彼の強みは議会との交渉にあり、レトリックにはたけていない大統領でした」

「能力主義のイデオロギーを克服し、働くことの尊厳を取り戻すには、どうすれば。

「バイデン政権は政策的には良いスタートを切っています。良いイデオロギーの次元では、中道左派政党は人々の怒りに向き合い、その使命と目的を再定義する必要があります」

「家族から地域、そして国家へと続く共同体において、人々の帰属意識や相互義務感、社会的な調和が失われています。自分たちがどう統治されるべきか、意味のある発言権を持っていると誰もが感じられるよう、自治のプロジェクトを活性化させなければなりません」

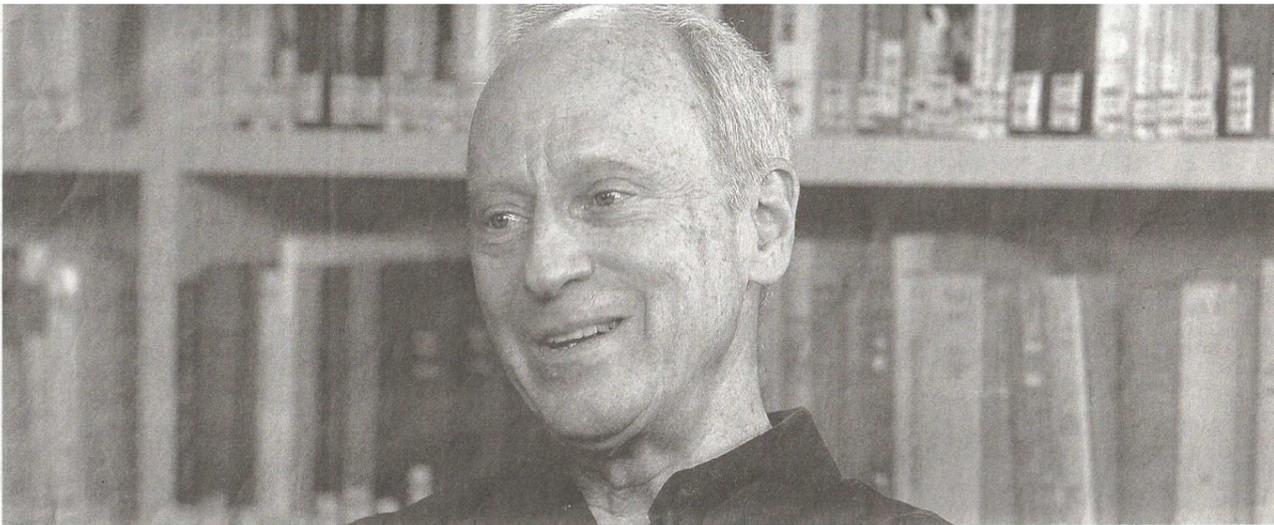
「市民生活の次元ではどうでしょう。公園や公民館、図書館、公共交通など、多様な階層の人が交ざり合う公の場を再興しましょう。空間を共有することで、同じ社会の中に生きつぎます。地域社会の道徳的土台を再構築し、人々が抱える無力感に対処する必要があります。でなければ、エリートに対峙する代弁者を装うト

ランブのようなデマゴグを人々は受け入れてしまっています」

「私たちは「消費者」のアイデンティティーにとられすぎていた、と指摘しています。」「グローバル化は衣料品などの国外生産のコストを下げ、消費者としての米国人を助けました。しかし、その代償として生産者としての米国人に深刻な打撃を与え、中西部各州の工業都市は空洞化しました。こうした激戦州では今回、トランプが全勝しました。消費者としてのアイデンティティーに気をとられすぎた結果、生産者としての米国人を支える政策の重要性が軽視されたのです」

「良質な雇用を維持するという意味で経済的に重要なだけでなく、労働の尊厳の観点からも、政治哲学上も大切です。自らを消費者とだけ考えていれば、単に安い商品を追いかけるだけになってしまふ」

「しかし、自らを生産者と位置づけるとき、自分の仕事や育んでいる家族、奉仕する地域社会を通じて、私たちは共同体の『共通善』に貢献する役割を担っていると感じます。それが国づくりにもつながるのならば、私たちは単なる消費者ではなく、政治的な発言権を持つ『市民』なのだと考えられるようになります。それは、政治的な無力感の克服にもつながるはずです」



「あらゆる共同体のくびきから解き放たれ、専ら自己実現に励む人間像を描いたこと。そして、そこから取り残される存在への想像力を欠いたことに「リベラルの敗北」の一因があった。同胞としての連帯感や帰属意識がなければ、富の再分配を倫理的に正当化することも難しいはずだとサンデルさんは言う。とはいえ、特定の共同体にひもづいた「道徳」への忌避感はなく、なお根強いだろう。家長主義や排外主義に陥らずに、同じ社会の成員としての誇りと尊厳を重んじる新たなリベラル像を、どう構想するか。賃労働が否かにかかわらず、社会に何かを生み出す「生産者」の役割を再評価することは、その一歩になり得ると思った。（江測崇）

「AI（人工知能）も、その方向性について人々の発言権を確立できなければ、労働の尊厳を一段と損なってしまうだろう」

「AI（人工知能）も、その方向性について人々の発言権を確立できなければ、労働の尊厳を一段と損なってしまうだろう」